

沈約『宋書』における蔡興宗像の構築

— 袁粲像との比較を通して —

稀代麻也子

はじめに

沈約の父璞は文帝弑逆にからみ、孝武帝側によつて殺された。少年時代にそれにまつわる辛酸を舐め、激動の時代を生き抜くことの難しさを身を以て体験した彼が擲んだ信念は、たとえば彼の著作である『宋書』の、隠逸伝における「隠」の捉え方に具体的に示されているが、本稿では前稿^②に引き続いてこれを別の角度から確認する。今回取り上げるのは、激動の時代に呑み込まれて死んでいった袁粲と、それとは対照的に悠々と生ききつた蔡興宗である。この二人は姻戚関係にあり、年齢も五歳しか差がない^③。孝武帝の大明七年（四六三）にそろつて吏部尚書となり、明帝崩御の際には共に顧命を受けている、というように深い関係があつたはずである。しかし意外なことに、『宋書』において袁粲と蔡興宗とが同時に登場する機会は極めて少な

い^④。しかも、この二人の本伝は質的に全く異なる書かれ方をしており、沈約は明らかに蔡興宗を称揚する。本稿の狙いは、時代の渦中にあつた人物を沈約がどのように描き出しているかをみることを通して、『宋書』が科学的意味での事実の記載を目指したものではなく、文学として読むに耐える沈約の作品となり得ていることを確認することにある。『宋書』・『南史』の袁粲伝と蔡興宗伝の描かれ方の違いをみることによって、『宋書』における人物の描き方が聊か強引であることを確認し、そこから沈約が蔡興宗的生き方に共感していることを読みとり、なぜ沈約がそのような蔡興宗像を必要としたのか、その意味を考える。

—

滑稽味を帯びた「誹諧文」によつて周囲をあざ笑つていた袁淑は、文帝弑逆に絡んで殺された。彼が『宋書』にお

いて十分に称揚されていないこと、それが沈約の人間観察と深く結びついていることを前稿で確認した。自分が正しくて周囲が狂っているということを狂泉の話に託した袁淑の甥袁粲も非業の死を遂げているが、『宋書』は袁粲をどのように描いているのだろうか。

『南史』との比較を通して先ず知ることができるのは、『宋書』で袁粲が「雅」の字で表現されていない、ということである。『南史』では、叔父の袁淑が「雅もて」袁粲（愍孫）を重んじたとし、前廢帝に裸にされても「雅に歩くこと常の如」き落ち着いた人物であったとするが、『宋書』にそのような記述はない。

顔師伯と袁粲とのやりとりの描写でも、『宋書』と『南史』の違いははっきりしている。

転吏部尚書、左衛如故。其年、皇太子冠、上臨宴東宮。愍孫勸顔師伯酒、師伯不飲、愍孫因相裁辱。師伯見寵於上、上常嫌愍孫以寒素凌之、因此発怒、出為海陵太守。

（吏部尚書に転じ、左衛たること故の如し。其の年、皇太子冠し、上東宮に宴するに臨む。愍孫、顔師伯に酒を勧むるも、師伯飲まず、愍孫因りて相ひ裁辱す。師伯上に寵せられ、上常に愍孫の寒素を以て之を凌するを嫌へば、此れ

に因りて怒を發し、出だして海陵太守と為す。）

『宋書』ではこのように話の大筋を淡々と記すだけであるが、『南史』では激怒した孝武帝が喚きながら袁粲を成敗しようとしたことを描写した上で、「愍孫色変せず」とし、周囲の取りなしによって左遷で済んだ、という書き方をしている。これによって『南史』の読者の視線は、袁粲の人との接し方ではなく、彼の自若とした態度に注がれることになる。

袁粲の改名に関しても、『宋書』と『南史』では読者の受け取り方が違ってくる。『宋書』では、「愍孫幼きより荀奉倩の人と為りを慕ひ、世祖（孝武帝）に白して、改名して粲と為さんことを求むるも、許されず。是に至りて太宗（明帝）に言ひ、乃ち改めて粲字景倩と為す」とだけ記す。『南史』では、王筠の「明帝忌諱多し。袁粲を反語すれば殞門と為る。帝意に之を惡み、乃ち改めしむ」という言葉を続ける。ここで注目したいのは、「（粲は）後に荀粲を慕ひ、自ら名を改む。会稽の賀喬之を譏る」（『南齊書』卷五十二「文学王智深伝」と、袁粲の改名を非難する人もいたらしい、ということである。『宋書』を読む者はごく自然にこの方向で解釈したのであろう。だからこそ『南史』では、改名の責任を明帝の迷信深さに帰した、ともい

えるのではないか。

宋齊革命は忠臣としての袁粲を称揚するのに格好の場面である。袁粲は、「時に齊王功高徳重く、天命帰する有」つたにもかかわらず「二姓に事ふるを欲せず、密かに異図有り」、予想通りに敗れ去るのだが、その間の経緯を『宋書』は時折短いセリフをはさむ他は淡々と綴っているだけである。彼の殉死の場面の記述が分量的には『宋書』の四倍ほどに膨れ上がっている『南史』の、「本より一木大厦の崩るるを止むる能はざるを知るも、但だ名義を以て此に至る耳」、「我は忠臣たるを失はず、汝は孝子たるを失はず」と引くような息子最への語りかけはない。また、「臣義もて大宋に奉じ、策名両つながら畢はる、今便ち魂を墳壙に帰し、永く山丘に就かん」と啓してから斬られる、というような演出も、『宋書』の中では一切なされていない。あくまで簡潔に概略だけが示されている『宋書』の袁粲伝には、実際に生きていた袁粲の人間くささがないのである。

袁粲は『宋書』において一人で一卷という待遇を与えられるながら、記述の分量は父蔡廓の伝に附載されている蔡興宗の半分以下にしか過ぎない。これを『宋書』執筆時点での齊王室への配慮、という観点から捉えることもできる

が、それだけでは、『宋書』が描こうとしたことを本質的に把握することはできないように思われる。沈約は、「朝野の望」が高かった袁粲のマイナス面を決してあからさまには批判しない。さりとして、忠貞の臣としての袁粲のプラス面を強調して書くこともしていない。ただ淡々と叙述するという手法を通して、義は生よりも重いとばかりに死んでいった袁粲の、「天命に達せざる」姿を示すのである。

『宋書』では「妙徳先生伝」の引用によつて自らを嵇康になぞらえた袁粲の理想の高さを示す一方で、袁粲のゆつたりとした姿は極力記さない。また、『南史』では妙徳先生と袁粲の姿を重ねるかのように、続けて袁粲の「悠然」とした姿を書き連ねるが、『宋書』では、彼が明帝の『周易』の講義を受けた事実が記されているだけである。袁粲伝を讀んでも、悠然とした袁粲の姿はみえてこない。狂泉の水を自分だけは飲んでいないのだと周囲を睥睨する袁粲の理想は、必ずしも現実と結びついていかない。実際の彼がどうであったかは別にして、『宋書』において、袁粲は人間的なしみじみとした感情に欠け、癩癩だけ強く、周囲を無視した理想に走つて自ら殺される方向へと突き進んでいった典型として、冷たく描かれる。

『宋書』の袁粲は言葉少なに淡々と語られていることを前章で確認した。ここでは、それとは対照的に、沈約の恩人ともいえる蔡興宗の描写が饒舌であることを確認し、沈約が描きたがっていた蔡興宗について考える。

『宋書』蔡興宗伝は分量的に『南史』よりも大分多いにもかかわらず、蔡興宗が不器用に人と接している様子については細かな描写がされていないことが先ず注意すべきこととして挙げられる。これは孝武帝との確執の描き方に顕著に示される。『宋書』で「毎に得失を正言し、顧憚する所無く、是れに由りて旨を失ふ」とだけ記されている部分を、『南史』では引用を駆使して生き生きと描写する。ここに現出する蔡興宗は、正論を吐いて皇帝の機嫌を損ねる硬骨漢である。

この関係が、前廢帝子業の時代になると逆転する。『南史』では削除されてしまっているようなことを、『宋書』では子細に書く。前廢帝が即位すると、戴法興・巢尚之ら恩倖が実権を握って恣にふるまっていた。この時銓衡の任にあった蔡興宗は、なんとかまともな人事を行おうとするが、劉義恭によって左遷を企てられる。『南史』では劉義

恭が柳元景に奏させたこの時の上奏文自体はほとんど引かずに「興宗及び尚書袁愨孫私に相ひ与するを許し、自ら相ひ選署し、群を乱し政を書し、混穢大いに猷はかる」とまとめている。これに対して沈約は頰をいとわずに柳元景の上奏文全体を引く。その上奏文は、袁粲が蔡興宗の疏を持参の上、蔡興宗の呉郡太守固辞の件を支持し、人材を流出するべきではないと訴えてきたことからはじめられ、次にそれを裏付ける薛慶先の証言が続ぎ、人事をかき乱す蔡興宗を獄に下し、袁粲を免官するように、と結んでいる。それに対して、詔が下る。それは蔡興宗を左遷し、袁粲を劉義恭の監視下におくように、というものであった。この詔の結びで、袁粲は「竊に自己を評し、物議を委咎するのみなれば、子の領職を以てす可し」という扱いを受けている。このことは示唆的である。袁粲はあくまでも蔡興宗の為に行動した筈なのに、受け取られ方はそうではなかったことになる。そして結果としては蔡興宗を更なる窮地に追い込むことになりかねなかったのである。しかし、蔡興宗は新昌太守への遠流を免れた。それは「朝廷嗟駭せざる莫」かっただけで蔡興宗に人望があったからであり、また、顔師伯が今回の事件の元凶は自分であるという噂を気にしたことにもよる。間もなく劉義恭の一派は子業に無惨な殺され方

をすることになった。

蔡興宗の身の処し方が端的にわかるのは、外甥袁顥とのエピソードであろう。雍州刺史となった袁顥は、「危険な前廢帝のお膝元を去つて、外地に身を避けましょう」と蔡興宗を誘う。この時の「今虎口を去らずして、此の危逼を守り、後に復た出づるを求むるも、豈に得んや」という最後の一節を『南史』は削除している。しかし蔡興宗の身を案じる「今のうちに逃げておかなければ、逃げようがなくなる」という袁顥のこの言葉があつてこそ、慎重に物事を処理しようとする蔡興宗のあり方が鮮やかに見えてくる。袁顥の誘いは一見もつともなものであつたが、蔡興宗はそれを断る。

興宗曰、「吾素門平進、与主上甚疎、未容有患。宮省内外、人不自保、会必有变。若内難得弭、外讐未必可量。汝欲在外求全、我欲居内免祸、各行所見、不亦善乎。」

(興宗曰く、「吾素門平進にして、主上と甚だ疎なり、未だ患ひを有するを容れず。宮省内外、人自ら保たず、会たま变有るに応ず。若し内難弭むを得ば、外讐未だ必ずしも量る可からず。汝は外に在りて全を求めんと欲す、我は内に居りて禍を免れんと欲す、各見る所を行ふも、亦善な

らざるか。)

「お前はお前の考えに従つて外地で安全を図れ、俺は内にあつて禍を避けるつもりだ」という蔡興宗の言い方は、自分の身の処し方を説明するものである。そこにおしつけがましさはなく、袁顥の考え方を尊重している。

時京城危懼、衣冠咸欲遠徙、後皆流離外難、百一存。(時に京城危懼し、衣冠咸遠く徙らんと欲するも、後皆流離し外難にあひ、百に一も存せず。)

このようなその後の歴史の流れは、胡三省も指摘するように、興宗の見識の正しさを証明するものであつた。

蔡興宗の情況分析と判断がいかにも理にかなつていたかについては、沈慶之にクォーターを勧めるやりとりによつてもよくわかる。身に危険を感じてノイローゼ気味になつている沈慶之からの使いに、興宗は「あなたが門を閉じて避けているのは、下心があつてやつてくるような輩に対してではありませんか。私は違うのに、どうしてあなたは私と会おうとなさらないのですか」とことづける。沈慶之はやつと蔡興宗と直接会う気になつた。そこで蔡興宗は現状に対する自分の見解を述べる。「前廢帝はまだ幼いから、將來までもなる可能性は否定できないと思つていたのでが」、「最近の行き過ぎは目に余り、あなたの身に害が及ぶ

のではないかと心配だ」とし、「戦々兢兢とした中で皆が期待をかけているのは今やあなただけなのだから、責任はあなたにかかっている」「あなたは力をもっているから、クーデターを起こせば皆が従うでしょう。やらなければやられてしまいますよ」と勧め、自分が昔沈慶之のもつて働いていた時にかわいがつてもらったから敢えて本音を言うのだ、と言いつ添えた。このうち、「(子業) 紹臨するや、四海清謐たり、即位のとき正に是れ挙止衷に違ふも、小小たる得失のみ、亦謂へらく春秋尚ほ畜めば、徳を進むること期す可し。而れども」と前廢帝の改心を願つて今まで觀察してきたこと、「百姓喁喁たり、復た仮息の望無く、冀ふ所は正だ公一人に在るのみ。復た成敗を坐視するが若きは、唯だ身禍の不測のみに非ず、四海の重責、將に帰する所有らんとす」と沈慶之に対して権力を持つ者としての社会的責任を説く部分は話の大筋を追うだけならば必要なく、事実『南史』では削除されている。しかし、これらがあることによつて読者は蔡興宗の冷静な情況判断の実際に触れることができ、また、我が身ひとつを保つということに止まらない、上に立つ者としての責任をはっきり認識している人物なのだと判断できる。

ところが、蔡興宗の情ある言葉に対して、沈慶之は「最

近の情況はわかつているが、私は忠にもとることは考えたこともない。しかも老いてしまつて兵も最早実践では役にたたず、気持ちだけはあつても実行は無理だ」と後込みする。これを受けて興宗は、沈慶之がクーデターを起こしてもそれは不忠ではないことと、味方がいかに多いかということとを述べる。ここに引用される、「宗越・譚金の徒は、公の宇下に出で、並びに生成を受く、攸之・恩仁は、公の家口の子弟のみ」「且つ公の門徒義附は、並びに三呉の勇士たり、宅内の奴僮は、人数百有り。陸攸之は今東に入り賊を討ち、又大いに鎧仗を送る、青溪未だ発せざるに在り。攸之は公の郷人、驍勇にして胆力有り、其の器仗を取りて、以て衣を宇下に配し、攸之をして以て前驅を率ゐしむれば、天下の事定まらん」という言葉は、『南史』では繁を厭うて割愛している。しかし、具体的な人名の列挙が『宋書』にはあることによつて、蔡興宗が信頼すべき根拠に基づいて話す人物であることが浮き彫りにされる。

蔡興宗は更に、歴史的教訓に学ぶようにと忠告する。この部分、『南史』では「前世の故事を案」じたというだけだが、『宋書』では続けて「昔太甲の罪は民に加へず、昌邑の虐は下に及ばず、伊尹・霍光は猶ほ大事を成すがごとし、況んや今蒼生窘急たり、禍ひ百たび往きて代へんや」

と、伊尹・霍光の故事を具体的に挙げて、蔡興宗が空論を吐いているわけではないことを印象づける。さらに、「巷ではあなたが朝廷でいかに力をもっているかということが話題になっているのだから、今のうちにことを起こさないと大変なことになる、よく考えてみて下さい」と、今こそ決断すべき時であることを重ねて言う。しかし最後には、沈慶之に最終的判断を任せる。沈慶之は、とうとう実行にうつさないことを次のように宣言する。

深感君無已。意此事大、非僕所能行、事至故当抱忠以没耳。

(深く君に感じて已む無し。此の事の大なるを意へば、僕の能く行ふ所に非ず、事至らば故より当に忠を抱きて以て没すべきのみ。)

沈慶之は後に顔師伯がクーデターを起こそうとした時にその謀を漏らした人物であるが、『宋書』では「深く君に感じて已む無し」という『南史』で削除されている言葉を使って、沈慶之が蔡興宗の懇切な説明に感じ入っていることを強調する。子業廃立を画策する蔡興宗の一連の行動が何故漏洩しなかったのかについて、胡三省は、沈慶之・王玄謨・劉道隆の自分一個の保身の為だとする。しかし『宋書』では、蔡興宗の情報分析の的確さと、それを伝える際

の態度によって蔡興宗が相手の信頼を得ていた為であることを強調するような描き方をしているのである。「頃之して、慶之果たして忌まるるを以て禍を致す」、やがて、事は蔡興宗の予想していた通りになった。

王玄謨もまた、ノイローゼになっていた。「王玄謨はもう誅されてしまった」という噂が郷里に流れて大騒ぎになっていたからだ。そんな流言が真実味を帯びてしまうような状況であった。王玄謨はそこで、信頼を寄せる典籤の包法栄を蔡興宗のもとによこす。蔡興宗が見舞いを述べるに、包法栄は拒食症と不眠症に陥っている王玄謨のひどい有様を、「領軍比日殆ど復た食さず、夜も亦眠らず、常に『収已に門に在り、俄頃も保たず』と言ふ」と伝える。これをきいた蔡興宗は、どうして坐して禍を待つのか、と言う。もともと、王玄謨は部曲三千人を有していたが、前廢帝の猜疑心によって嚴重な監視下におかれた。王玄謨はこれを深く怨み、五百人を墓守として巖山に留めたのだが、蔡興宗はこれを使ってクーデターを起こせ、と言うのである。

当今以領軍威名、率此為朝廷唱始、事便立剋、領軍雖復失脚、自可乘輿処分。禍殆不測、勿失事機。君還、可白領軍如此。

(当今 領軍の威名を以て、此れを率ゐて朝廷の為に唱始すれば、事便ち立ちどころに剋たん。領軍復た失脚すと雖も、自ら擧に乗りて処分す可し。禍ひは殆んど測らず、事機を失ふ勿かれ、と。君選りて、領軍此くの如しと白す可し。)

「領軍憂懼すれども、当に方略を為すべし、那んぞ坐して禍ひの至るを待つを得ん」という蔡興宗の言葉に始まる包法榮とのこの一連のやりとりを、『南史』は「興宗は法榮に困りて玄謨に挙事を勧む」と手際よくまとめしまつてゐる。しかしこれだけでは、情勢を見据えて判断を下す蔡興宗の力量は見えてこない。自分のもとに使いをよこした王玄謨に対して具体的方策を挙げた上で迅速な行動を促すという描写があつて初めて、蔡興宗の分析力を窺うことができる。結局、王玄謨も沈慶之と同じく実行には移さないことを伝えてくるが、同時に「此れも亦未だ行ふ可く而易からざれども、当に君の言を泄らさざるべきを期す」と約束する。この言葉は、蔡興宗の思考の筋道が詳細に示されている『宋書』の記述があつてこそ、生きてくる。ここでもまた、蔡興宗の観察眼と人柄が信頼を寄せられるに足るものであつたことが読者に伝わってくることになる。

次に描かれるのは、子業から辱めを受ける袁粲達と、た

だ一人免れ得てゐる蔡興宗の姿との鮮やかな対照である。帝毎因朝宴、捶毆群臣、自驃騎大將軍建安王休仁以下侍中袁愍孫等、咸見陵曳、唯興宗得免。

(帝毎に朝宴に困り、群臣を捶毆し、驃騎大將軍建安王休仁より以下侍中袁愍孫等、咸陵曳せらるるも、唯だ興宗のみ免るるを得たり。)

簡単な記述の中に、狂悖の天子の攻撃を見事にかわしてゐる蔡興宗の処世の巧みさが描き出されてゐるといえるだろう。似たような記述は孝武帝時代でもされていた。

軫掌吏部。時上方盛淫宴、虐侮群臣、自江夏王義恭以下、咸加穢辱、唯興宗以方直見憚、不被侵媿。尚書僕射顏師伯謂議曹郎王耽之曰、「蔡尚書常免昵戲、去人実速。」

(軫じて吏部を掌る。時に上方に盛んに淫宴し、群臣を虐侮し、江夏王義恭より以下、咸穢辱を加へらるるも、唯だ興宗のみ方直を以て憚られ、侵媿を被らず。尚書僕射顏師伯議曹郎王耽之に謂ひて曰く、「蔡尚書常に昵戲を免ぜらるること、人を去ること実に速し」と。)

『宋書』ではこれに続けて後日談を配置する。明帝が即位して危険が去ると、王玄謨は自分が行動を起こせなかつたことについて、郭季産たちの進言が足りなかつたからだ

と責任転嫁をしようとした。すると郭季産は、「蔡興宗の言はこの上もなく正しかったのに、あなたが実行できなかっただけではありませんか。蔡興宗の言葉ですらあなたに通じなかつたのですから、私などが何を言っても無駄だつたでしょう」とやりかえす。王玄謨はこれをきいて恥じた。

この話を、『南史』では明帝のクーデターの記事の後に置く。時間的順序を考えれば『南史』の排列が正しいことは言うまでもないが、王玄謨の先見の明のなきによつて蔡興宗の觀察の正しさを描き出している点で、『宋書』のこの排列にはやはり意味がある。

薄氷をふむように生きざるを得ない緊迫した情勢の中にあつて、蔡興宗が人ときあう際にいかに厚い信頼關係が成立していたかは、劉道隆とのやりとりによくあらわれている。道端で劉道隆に行き会つた時のこと、蔡興宗は「近頃ちよつと思うところがあるんですよ」と声をかける。この真意を深く理解した劉道隆は蔡興宗の手をつねつて「言つてはだめだ」と答える。劉道隆という、子業の手先として禁兵を任されているような人物に対してすら自分の見解を伝え得ている。蔡興宗は現実のひどさを、ただ手を束ねてみているわけではなく、先の先まで見据えた上で積極的

に関わつていこうとする。彼の情況把握の正確さは、言動の結果として自らを窮地に追い込むことには決してならなかつたことによつて示される。

三

一で袁粲伝、二で蔡興宗伝をみたように、『宋書』においては蔡興宗伝と袁粲伝とは大分趣きが違う。蔡興宗伝では前廢帝の時代の活躍にはつきりと重点がおかれて叙述され、分量的にも全体の半分以上の文字数を割く。話の筋を追う為には必ずしも必要ではなく、『南史』では略したり要約したりしているような蔡興宗と相手とのやりとりを敢えて引用することによつて、官界で活躍する彼の姿が効果的に活写される。これに対して、袁粲伝の方は淡々と簡潔に書かれていて叙述に軽重がみられず、量的にもどの部分が多いともいえない。『南史』が脚色することによつて初めて生き生きとした描写になる。

『宋書』に描き出された袁粲と蔡興宗の違いを鮮やかに示すのは、既に触れたように顔師伯の両者に対する態度の違いである。袁粲は顔師伯に近づこうとしながら、相手を輕蔑する気持ちが前面に出してしまつて受け容れて貰えない。それどころか、常日頃から顔師伯だけでなく孝武帝の

反感を買っていた為に、これを機会と左遷されてしまうことが、論理的に簡潔に書かれる。一方同じく宴の場面で、殆ど例外なく孝武帝の辱めを受ける士大夫達の中ただ一人その害に遇わずにすんでいる蔡興宗に対して、『宋書』は顔師伯の感嘆の声を引用する。『宋書』での描かれ方を通して、顔師伯が袁粲を嫌う一方で蔡興宗には一目おいている、ということが、明らかにわかる。

沈約はどのような時代にあつても生き抜いて行く為にはどうすればよいのかを、自分が共感を寄せる蔡興宗と、そうではない袁粲とによつて示したといえる。その際にとられたのは、袁粲伝においては極力簡潔に平板に記し、蔡興宗伝においては時に煩瑣とも思われる発言の引用を厭わずに、強調すべき所は強調し徹底的に蔡興宗と周囲の人物との関わりを記す、という手法であつた。それによつて読者の前には、無機質で冷たい袁粲像と、血の通つた信頼すべき存在としての蔡興宗像が現出するのである。

おわりに

以上、『宋書』袁粲伝と蔡興宗伝とを、処世の巧拙と伝における描写の繁簡をみることによつて比較した。『宋書』が袁粲に対しては素っ気ない描写をしている一方、蔡興宗

を描く際には煩瑣な引用を厭わず、彼の先見の明や人間関係における慎重さを描写していること、沈約が共感を寄せるのが悠々と時代を乗り切つた蔡興宗であつたことを確認した。この二人の姿は、前稿で考察した袁淑像、王徽像と見事に重なりあつていられると思われる。前回は元嘉時代の記事を取り上げた為に沈約の編集作業に重点をおいたのだが、今回取り上げたのは主に前廢帝子業時代、沈約が二十代半ばに達していた時期のことであり、直接沈約が執筆した部分が主体である為、より具体的に描かれ方を検証することができた。沈約はいうまでもなく、単に客観的記述を主としてのみ『宋書』をものしたわけではない。ものごとの全体を見極めた上で、それぞれの人物の記述の仕方に軽重をつけている。現実とは遊離した生き方である故に憧れの対象ともなりがちな英雄的人物に対して、決して手放しの称賛を与えることをせず、淡々と事実を羅列することによつてそういう人物の処世に対して関心がないこと、それどころか批判的ですからあることを示しているのだということとを袁粲伝で見た。沈約にとつて後世に残すに足るのは、華々しい英雄ではない。激動の時代を静かに生き抜いた人をこそ、魅力的に描く。何故なら、人間が必要としているのは、生きる智慧だからだ。個人の身に引きつけて徹底的

に追及していった結果が抽象性の獲得なのであり、その逆ではない。沈約は「乱世の矛盾をどうやってひきうけていったのかという他人の個人的体験を通して、現実を把握しようとする」^⑥ 感覚を備えていたのである。英雄に歴史は必要ない。激情にかられて自ら死に向かうような英雄は、あくまで妄想における憧れの次元にとどめるべき存在であり、歴史を糟糠としてではなく現在の困難な時代を生きる我が身にひきつけて考える際には参考にならない。ごく普通の、周囲と関わりを保ちつつ当たり前に生きていかなければならない人間にとつてこそ、歴史は必要なのである。

沈約は『宋書』で、自らの憧れである悠々たる生き方をした具体的姿として蔡興宗を描き出そうとした。現実と関わりあいながら、しかも翻弄されることなく常にゆつたりと生きていたい、生きていて欲しいという思いを、沈約は蔡興宗という人物を描き出すことを通して読者に語りかけている。書かれることを期待されている事柄に語っては書き、書いてはならないことは書かないでおきながら、記述の繁簡という方法を用いて自分の思いを表現しようとしている『宋書』は、やはり単なる事実の記録ではなく、作者の託した思いを読みこむことに耐えうる作品だといえる。

注

① 『宋書』隱逸伝序に「陳郡袁淑集古来無名高士、以為真隱、格以斯談、去真遠矣。」とある。沈約の隱逸については、神塚淑子「沈約の隱逸思想」(『日本中国学会報』第三二輯 一九七九年)に詳しい。

② 《沈約『宋書』の「文史」と仁——王微伝と袁淑伝の比較を通して——(『青山学院大学文学部一九九九『紀要』四一号 二〇〇〇年一月)

③ 「時尚書右僕射蔡興宗是顛、領軍將軍袁粲是顛從父弟、故書云群從舅甥也。」(『宋書』卷八十四袁顛伝)

④ 袁粲は四二〇～四七七、蔡興宗は四一五～四七二。許福謙は蔡興宗の生年を四一六年とし、五十七歳で死んだとする(『宋書』紀伝疑年録)『首都師範大学学報』社会科学 一九九三年四期)が、今はとらない。

⑤ 本稿で引用する前廢帝時代の二条の他に二人が同時に登場するのは、明帝の顧命に關すること(蔡興宗伝/明帝紀)、二人が姻戚關係にあること(袁顛伝/袁粲伝)である。

⑥ 袁粲は『宋書』卷八十九/『南史』卷二十六、蔡興宗は『宋書』卷五十七/『南史』卷二十九にそれぞれ伝がある。

⑦ 「先是、興宗納何后寺尼智妃為妾、姿貌甚美、有名京師、迎春已去、而師伯密遣人誘之、潛往載取、興宗迎人不覺。及興宗被徙、論者並云由師伯、師伯甚病之：欲止息物議、由此停行。」(『宋書』蔡興宗伝)

⑧ 「蔡興宗可謂先見矣。」(『資治通鑑』卷百三十注)

⑨ 『史記』卷三、『漢書』卷六十八参照。

⑩ 「師伯專斷朝事、不与沈慶之參懷、謂令史曰『沈公爪牙者耳、安得預政事』慶之聞而切齒、乃泄其謀。」（『南史』卷三十四顏師伯伝）

⑪ 注⑧参照。「人不敢泄其言、何也。昏暴之朝、人不自保、時曰書喪、予及汝皆亡」蓋人心之所同然也。」

⑫ それぞれの話の配列を示しておく。『宋書』（王玄謨とのやりとり／後日譚／劉道隆とのやりとり／前廢帝の凶悖／劉彧／明帝）による政權奪取、『南史』（王玄謨とのやりとり／劉道隆とのやりとり／前廢帝の凶悖／劉彧による政權奪取／後日譚）

⑬ 沈約が『宋書』において人物を評するのに処世の面から論ずることが多いことは、李潤和も指摘している。「他所作的有關人物評價的史論、大部分都与処世的内容有關。」（従『宋書』史論看沈約的天命觀与処世觀）『中国史研究』一九九四年一期

⑭ 「自永光以来、至於禪讓、十余年内、闕而不統。」（『宋書』卷百自序）

⑮ 「有超過他人对乱世矛盾理解的個人体験、试图去把握现实。」符瑞志や五行志に力を入れていることから『宋書』には現実的な感覚がないと断ずる論調に対する李潤和の反論である。（従『宋書』史論看沈約对现实的認識）『文史哲』一九九三年三期。

（青山学院大学院）